市長あいさつ

皆さんこんにちは。北九州市長の武内和久でございます。本日はミライ・トーク若松区に多くの方に起こしいただきありがとうございます。パネリストの皆様もありがとうございます。

来て早々に、トマトをいただき気分も上がっておりますが、いま松浦さんからお話しくださったように若松には食もあり、歴史もあり、自然もあり、色々なものがそろっているということで、太陽を感じます。農産物もそうですし、ひまわりもあり、夕日もきれいなところがある。本当に魅力あるこの若松の未来を皆さんと一緒に考えられることを今日楽しみにしたいと思います。食だけなく、石炭の積出港として発展してきた歴史もあります。近年では 10 年間で 3 倍程度の人口が伸びている非常に元気のあるエリアでもあります。もっと知ってもらいたい、もっと多くの人に来てもらいたい、色々な魅力がつまったポテンシャル十分のエリアですので、そのどこを伸ばしどのようにこれから知らしていけばいいのか、どんなまちを目指していけばいいのか、皆さんのディスカッションを活発に行っていただけることを楽しみにしております。どうぞ今日はよろしくお願いいたします。

パネルディスカッション

進行（重岡）：

それでははじめに、パネリストの皆さんから自己紹介をお願いしたいと思います。藤村いづみさまからお願いします。

藤村氏：

若松がんばろう会の藤村いづみと申します。私は若松で生まれ若松で育ち、若松の中でも北海岸エリアに住んでおりまして、海が真裏にあります。

私が所属している、若松区の若手の商店関係者でつくる若松がんばろう会は、中心地区のイベントの運営を定期的に行い、若松の賑わいを目指しています。実家は北海岸で長年料亭を営んでいましたがコロナで業態を変え、現在はゲストハウスとライダーズカフェを営んでいます。また祖母が長年、脇田海水浴場で海の家をやっておりました。わたくし自身は若松区に２店舗、八幡西区に１店舗、カーブスという女性専用のフィットネスジムを運営しており、女性の健康寿命が延びたらいいなと思い日々活動しています。本日はよろしくお願いします。

進行（重岡）：

ありがとうございます。続いて先ほどお野菜の紹介もしていただきました、松浦剛さまお願いします。

松浦氏：

改めまして、松浦ファームの松浦剛と申します。松浦ファームは 100 年以上農業を続けている、リアルガチ農家です。夏場、冬場とそれぞれの季節に合った野菜を生産していますが、ここ数年、コロナの影響もあり、少しずつ経営方針を変えています。消費者の皆さんに直接、新鮮なものを美味しい状態で買っていただくであるとか、収穫体験をするであるとか、また雇用に関しては、障がい者を雇用するなど、いろいろなことにチャレンジしている農家です。今日は若松の未来を皆さんと考えていきたいのと同時に、改めて皆さんに若松のおいしい野菜を知っていただけたらと楽しみにしてきました。よろしくお願いします。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。続いて、森友里歌さまお願いします。

森氏：
　北九州市立大学大学院の建築デザインコースに在籍しております、森友里歌と申します。本日はよろしくお願いいたします。私の専攻について話ししますと、建築の分野の中でも意匠設計と呼ばれる建築設計の中でもデザインの勉強をしています。いま、北九州市立大学に来て約９年目になりますが、まだまだ先輩方に比べると若松歴が短くてひよっこなんですけれども、今日は一生懸命若松の未来について、皆様と議論できればと思っております。よろしくお願いいたします。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。続いて、山手健矢さまお願いします。

山手氏：
　皆さんこんにちは。北九州市立大学で博士課程の１年生をしています、山手健矢と申します。よろしくお願いします。
　私は学生なので、私の研究を少しご紹介すると、一つは飲食店にある排水溝の悪臭を何とかしたいというのを５年くらい続けていまして、昨年も北九州市さんから助成金をいただき、そういった装置の開発をしていました。二点目は、最近カンボジアでカシューナッツの研究をしていまして、今日はカンボジアからのカシューナッツを持って来ていますが、実はカンボジアは世界有数のカシューナッツの産出国で、かなり実が大きい珍しいカシューナッツです。イベントが終わったら皆さんにも食べていただこうと思っておりますので、ぜひ試食してください。最後に、私はアントレプレナー教育もやっていまして、ご存じかもしれないですが、起業したい子どもたちを育てるような教育プログラムになっています。北九州市は姉妹都市がいくつかありますが、そのうち韓国と中国とベトナムとそしてカンボジアを対象に留学生が北九州市立大学にきていまして、その留学生とうちの学生、さらにひびきの小学校の子どもたちが一緒になってお土産のデザインを考えようというのを講座としてやっています。お土産は留学生が選んだ、例えば姉妹都市であればベトナムのお土産でパッケージをつくり、11 月ぐらいに実際にひびきの秋祭りで販売しよう、というところまでやるイベントとなっています。皆さんもし、私たちの大学祭に来ることがありましたら、小学生たちのお土産をぜひ買ってあげてください。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。子ども達と一緒にお土産をつくるのは楽しそうで、すてきな活動ですね。それでは続きまして、パネリストの皆さんが思い描く若松区の将来像について、どんな将来像をイメージしていらっしゃるか伺っていきたいと思います。藤村さん、お願いします。

藤村氏：
　若松が糸島に負けない観光スポットになることが、私の理想とする若松の将来像です。特にこの北海岸エリアは誰もが訪れたい、住んでみたい地域であることが大切だと思っておりまし

て、観光が活性化すれば他県への流出も抑えられるのではないかと考えています。先ほど区役所の方から説明がありましたように、このエリアの魅力というのは、農産物、海産物、また松浦さんをはじめとして生産されている若松のブランド野菜は北九州の誇りだと思っております。

また、北海岸エリアは２大海水浴場があり、釣りスポットや夕日もきれいで、アクティビティも今後盛んになってほしいなと思っております。ただし、そのためには更なる観光化が必要と考えております。物産館の周辺にもっと飲食店を増やしたり、ドッグランや雑貨店など誰もが楽しめるスポットを増やすべきだと考えております。

ただそのためには課題がございまして、一つはさきほどもおっしゃっていましたアクセスです。この周辺は車がないと来られる場所ではありません。バスの利用者も少なく、２時間に１本程度しかバスが無いので、外国の方から最近よくお問い合わせをいただきますが、なかなかアクセスが難しいということで諦めてしまわれたり、海水浴場へせっかく来ても帰りのバスがなくバス停で途方に暮れている若者を拾うことがあったりと、そういう方はたくさんいらっしゃいます。

また二つ目の課題について、これは賛否両論あると思いますが、市街化調整区域のことです。私も小さい頃はこの制度のことを知りませんでしたが、家を建てたくても建てられない方、飲食店を営みたくても市街化調整区域の関係で難しいということ、また両親の土地を売却したくてもその関係でできないということもあるので、そういう方がたくさんいらっしゃるのではと考えています。そのような課題を改善して、糸島に負けない観光スポットとなってほしいというのが私の心からの思いです。

進行（重岡）：

ありがとうございます。糸島いいですね。でも今お聞きしていると糸島と魅力がかぶっているといいますか、海が近いことなど、似ているところがありますね。市街化調整区域については区長にもアドバイスをいただけたらなと思います。続いて、松浦さんお願いします。

松浦氏：

話したいと考えていたことはほとんど藤村さんに言われてしまったので、少し違う角度からの提案というか考え方をお話ししたいと思います。若松は人口が減少し高齢化が進む中、若い人が就職を機に他県や他市に出て行ってしまうという課題があると思っています。僕としては、皆さん１人１人が自分のやりたいことをやっていく、そういった人生を歩んでいくと思うため、若松に留まってほしいというのは難しいと思いますが、出て行ってもいいけれど、若松の魅力を十二分に知ったうえで、羽ばたいていってほしいなと思っています。やはり自分が生まれ育った故郷であることに間違いはなく、そこに何があったのか、どういうことを経験してきたのか、そういうことを子どもたちにはしっかりと覚えておいてもらいたいですし、覚えておいてもらえるような教育をしていけたらいいのではないかと思っています。

色んなやり方はあると思いますが、農業の観点から申しますと、例えば子どもたちに若松農産物のおいしさを伝えるというのは、学校給食を通じて提供し「食べる」ことについては子供たちはすでに経験していますが、収穫体験であるとか、土に触れる体験であるとか、そのようなことを通じてより記憶と体感とが一緒になってより記憶に残るのではないかと思います。農業だけじゃなくてもいいと思いますが、やはり若松をしっかり知ったうえで外に出て行ってもらって、若松を外でプレゼンしてもらえるような、そういうまちづくりができるのが理想なのでは

ないかと思っています。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。子供たちに伝える教育というのは、我々大人がしていかなくてはいけないと思いますが、いまは農業の観点で収穫する体験ということでしたが、実際にいま収穫体験は、松浦さんはなさっていらっしゃいますか。

松浦氏：
　ＳＮＳ等で収穫体験を募集して、じゃがいもやさつまいも、キャベツ、大根などを収穫体験できるようにはしていますが、学校給食の関係でシーズンになると市内の一校の５年生のクラスが選ばれてうちに体験に来て収穫し、一緒に学校に行って、私の農業の話をして、一緒に給食を食べるということはやっています。ただ、やはり１年に１、２回くらいしかできず、なおかつ限定的に 30 人～40 人だけになってしまうため、難しく考える必要はなく、こういうことをしているんだ、ということをもっと映像などで他の体験できない子どもたちに見せることなど、勉強もものすごく大事ですが、そういうところにも時間をとって、若松区、北九州市の魅力を伝えていただけたらと思います。

進行（重岡）：
　じゃがいもを収穫したことがあるという方はこの中にいらっしゃいますか。いらっしゃいました。私も手を挙げます。私は最近収穫体験をしましたが、やはり実際に土に触れると全然違いますね。先ほど、松浦さんがおっしゃった、記憶に残るというのはそういうことかなと思いながらお聞きしました。ありがとうございます。続いて、森さんにお伺いしたいと思います。

森氏：
　私は先ほどの自己紹介でも申し上げましたように、建築畑の出身ですので、先のお二人は農業と観光から意見を述べられていたので、建築から少し何か意見できればと思います。
　まず若松区というのは、東部と西部、大きく２つ異なるまちの性格があると私はとらえています。東部は、建築から見ると南海岸を中心とする建築遺産が多くあり、そういったものはやはりこれから観光資源になる十分なポテンシャルがあるように感じます。西部ですが、私はやはりこの学研都市で生活をしているため、学研都市の性質についてですが、学研を中心とするアカデミックなエリアとして、若松は更なるポテンシャルがあるのではないかと感じています。毎年２月にはちょうどこの部屋に、コロナ以前は１２０人～１３０人が入って、建築の研究発表を行う国際会議が行われています。そこでは、東南アジアや交友のある海外の大学の学生や先生方がいらっしゃり議論を行っています。そういったアカデミックの地として、この地がもっと発展できるのではないかと考えています。

進行（重岡）：
　いま、東部の南海岸の建築の話も少し出ましたが、南海岸の歴史的な建物については、若松区のミライ・トークとして、８月 20 日にちょうど旧古河鉱業岩松ビルで開催されますので、そのあたりのお話かと思います。後半でお話いただいたのは学研都市ということで、国際会議が行われているということですが、そのようなアカデミックなことが増えていけばいいなというの

が森さんの将来像でしょうか。

森氏：
　はいそうです。

進行（重岡）：
　ありがとうございました。では、続いて山手さんからお願いします。

山手氏：
　私からは少し皆さんにアンケートを取ってみようかと思います。説明をする前に、私はここに登壇するくらいなので、結構頑張って地域で活動しているほうなのですが、私やテレビに出たことのある飛田君はここにいますか。手を挙げてもらって。彼はいま若松トマトでワインや醸造酒などをつくったことがあり、クラウドファンディングで有名だったりと、ＲＫＢテレビや新聞などに出ていて、あともう一人、九州工業大学の山崎君も手を挙げてください。彼も色々な活動でテレビに出たり新聞に出たりして、私ももちろんヤフーニュースに載ったりしているのですが、この３人の中の誰かを知っているという人は居ますか。知っている人は手を挙げていただきたいです。

進行（重岡）：
　結構いらっしゃるようですね。

山手氏：
　そこそこいるように見えるのですが、テレビに出ていても知らないということもあって、先ほどスライドにあったように、もう少しつながりの連携をつくっていきたいというのが思いとしてあります。

進行（重岡）：
　知る、とか、つながり、というのは大事ですね。どうしても点在してしまいがちですもんね。

山手氏：
　逆にここにいる皆さんがどういう活動をしているのか、私も知らないので、お互いの活動を知りあえるような場がもっと増えると、若松としてももう少しつながりが維持できるのではないかというのは感じています。

進行（重岡）：
　早速そういう集まりができたら素敵だなと思いながら、将来そういった場がたくさんできてくると良いかもしれないですね。ありがとうございます。
　将来像を具体化、具現化するためにどうしたらいいかというお声も少しずついただいていたのですが、もう一巡しましてそのあたり、将来具体的にどういうことを何からすればいいのか、もっとこうしたらいいのではないかと思うところ等、藤村さんからいかがですか。

藤村氏：
　今の私にできることはそんなに大きなことでないとしても、やはりこの地区を愛する地元民としてこの地域の方々と先ほどおっしゃっていただいたように積極的に交流して、それぞれ点で活動されている方が多いと思うので、それをつなげて、そのつなぎ役に自分はなれればと思っています。また、地元企業さんや行政さんと力を合わせて、一体となってこの地域を盛り上げようということで、全国に若松の魅力をＰＲしていくことも大切だなと思っております。

進行（重岡）：
　なるほどですね。今日すでに知り合いになったという感じがありますので、皆さんとこちらのパネラーの方々がここからまた一歩お互いに交流ができる、点と点をつなげる、つなぎ役になるというのはすごく必要なことですので、これからもよろしくお願いします。藤村さんは若松がんばろう会の会長ということで、そのあたりもこれから力を入れたいところでしょうか。

藤村氏：
　もちろんです。

進行（重岡）：
　がんばろう会を応援するっていいですね。はい、よろしくお願いします。それでは続いて、松浦さんからも伺ってよろしいですか。先ほど教育の面でコメントがありましたが。

松浦氏：
　現在考えているものと、実際に動いているものがありまして、農業している立場からの話にはなりますが、若松で作られている野菜を、種をまくところから収穫するところまで、GoPro 等を使って全部動画に収めて、そういう映像を今作っているのですが、それを新しい素材として学校側に提供して、今の農業、今のリアルな農業をお子さんに見ていただく。そういうことをまず今後、お子さんが体験していくことだと思います。もう進めていることですが、引き続き取り組んでいきたいということと、北海岸の海沿いのエリアは非常に魅力的だと私も思っていますので、あの通りのどこかに直売所を建てたいなと思っています。本当の若松というと語弊があるかもしれないですが、昔からある若松をご存じない方に少しでも足を運んでいただけるように、魅力ある店舗などを考えたいなと思っています。そういったところで、収穫体験ができるアンテナショップ的な役割を持たせて、とにかく若松の魅力をどうやって発信できるかということを突き詰めていきたいと考えています。

進行（重岡）：
　直売所であれば、作り手と買い手、食べ手がつながるポイントになるということでしょうか。

松浦氏：
　そうですね。やはり野菜というのは取れたてが一番美味しいので、極力その時間を短くしたいというのがあります。若松の野菜って改めて言いますが、全国で通用する野菜なんです。非常に品質が高くて、それはなぜかというと、若松の農家の方は今まで私のようにこういう場に出て話す方が少なかったと思うのですが、皆さん本当に職人肌で、おしゃべりはしないけれども

本当に最高のものをつくる、才能あふれた方がたくさんいらっしゃいます。あとはもうそれを発信するだけで、こういう場で言わせていただけるだけで、あとは来ていただければわかりますといったような、ものすごい職人気質な農家さんがたくさんいらっしゃるので、そこは自信をもっていろんな体験ができるように提供できると思います。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。ぜひそのようなことが実現していけばいいと思いますが、次に森さんにお尋ねしたいと思います。どういうことをしていけばいいと思われますか。

森氏：
　先ほど、東部と西部の観点からお話をさせていただきましたが、将来像を具現化するために何をするかについては、西部を中心にお話ししたいと思います。アカデミックなまちとして発信していくために、私自身ができることは、アカデミアンとなって世界に発信できるような素晴らしい研究をしていくこと、そして国際的にアピールできることというのが、私の役目かなと思っております。出身は北九州ではなく、福岡の南の方ですが、やはり９年も過ごしていて、この先北九州に残れるかはわかりませんが、第二の故郷のように感じています。そういった中で、９年過ごした魅力というものをひよっこですが感じていますので、アカデミアンとして発信していければと考えています。また次は、市長頼みかもしれないですが、この学研都市の第２ターム、第３タームの開発が引き続き行われていくことで、企業を誘致したり、またその企業の中で若い方が働ける環境を整備する必要があると考えています。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。続いて、山手さんお願いいたします。

山手氏：
　私は今日、つながりをテーマに少しお話をさせてもらって、その中でもやはりまだまだ若松区の区民同士でのつながりが少ないと感じたので、今から皆さんとつながりを作りたいと思って少しお話しします。
　先ほど松浦ファームさんの野菜を食べたらすごく美味しくて、これはぜひ地域の子どもたちに体験してほしいと私自身思いました。先ほどお話ししたように、アントレプレナーという活動でひびきの小学校の子どもたちを対象にやっていますので、その子どもたちと野菜を使ったお土産開発や野菜自身の販売体験までぜひやってみたいなと思います。食育まではもう松浦さんがプロでされているということだったので、大学の学生の身分ではあるのですが、何かお手伝いしたいと思いますが、松浦さんぜひ何か協力できないですか。

松浦氏：
　是非やりましょう。

山手氏：
　是非といっていただけて、松浦さんの「産業」と、私の「学」が連携できたので、ここは「官」も行こうと思いますが、若松区長いかがでしょうか。

奥野区長：
　是非。

山手氏：
　是非、いただきました。

奥野区長：
　せっかく皆さんが一生懸命頑張っていただいていますので、行政でできること、できないことあるかと思いますが、そこはしっかりこのつながりを絆にかえてやっていければと思います。

山手氏：
　絆ということで、私も一生懸命に頑張りますので、この後みなさん名刺交換などしていただいて、もし私たちのチームに関わっていただけるという方がいたら応援お願いします。それがもし形になりましたら、市長の方でぜひ若松ということでＰＲしていただければいいかと。ということで私からは以上となります。

質疑

進行（重岡）：
　ありがとうございます。色々とパネリストの皆さんにお話しいただきましたが、ここで今それぞれお話しいただいたことについて、例えば、人口の減少、高齢化の課題などがありましたが、若い方をどう巻き込んでいくか、引き込んでいくかということについて、お考えがあればお伺いしたい、という質問が来ております。藤村さんからいかがでしょうか。若い方を若松に惹きつけるにはどうしたらいいかなど。

藤村氏：
　はじめに市役所の方がスライドで見せてくださった若戸大橋などもそうですが、皆さんもInstagramで若松についてみる機会があると思いますが、若戸大橋や有毛のひまわりなど、発信されている内容が決まってしまっていて、でも実は他にもたくさんあるので、それをまずは若い方に知ってもらって発信してほしいなと思っています。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。松浦さんはいかがでしょうか。

松浦氏：
　若い方やお子さんたちが来たい、行ってみようかなと思えるようなコンテンツをこちらが用意できるかどうかが非常に重要なことだと思っています。例えば畑で体験できるのであれば、農作業、収穫体験ができて、そこで何か食べることができるとか、海岸を車で通りすぎるだけではなく、１回車を止めてそこで何か体験をするなり、思い出を作っていただけるようなものを用意していく。そういったものをいかにたくさん増やせるかを今から具体的に考えていくことが大事なのではないかと思います。

進行（重岡）：
　１回止まる、というのが大事ですね。先ほどの直売所もそうだと思うのですが、１回止まってみたくなるというのはいいと思います。さて、若い方々お二人、森さん、山手さんにも伺いたいのですが、皆さんが惹きつけられるような若松についていかがですか。

森氏：
　若い方を巻き込むというのはなかなか難しいことかなと思います。私も一応ですが若い方なので、やはり年配の方や少しジェネレーションギャップがあるような方と一緒にプロジェクトをさせてもらうときは、なかなかうまく考え方が一致しないなということや遠慮されているなという部分は感じます。このアンケートで質問された方は、恐らく若い方と何か接点をもっていきたいといった考えがあるのではと思うのですが、そのためには、やはりご自身が若い方を知るというのが大事だと思います。この辺で言うと、北九州市立大学の国際環境工学部には、どういった内容を勉強する学生がいるのか、どういった研究が盛んなのか、その視点から自分との接点を見付けてコネクトしていくということが具体的な方法かなと感じています。

進行（重岡）：
　お互いに知る、関心を持つということが大事なのではないかなとお話を聞きながら思いました。続いて、山手さんはいかがでしょうか。

山手氏：
　私はいま大学院生であと２，３年は学生なのですが、学生と接触するのは結構難しくないですか。大学の先生に会いに行って、ゼミ生を紹介してもらう以外で、ボランティアを除けばなかなか難しいと思うので、やっぱり学生と接点を持つ上では食べ物は有効で、先ほど私もスイートコーンを試食して非常に美味しいと思いましたし、何かしら一緒にご飯を食べる機会などを作って積極的に交流するというのが一番近道なのかなと感じています。

進行（重岡）：
　なるほどですね。食のコミュニケーションということで、大人の方々のコミュニケーションとなると、飲みニケーションがありますね。

山手氏：
　北九州の美味しい食べ物をもっと食べたいのでお願いします。

進行（重岡）：
　パネリストの方々にたくさんご意見を伺ってきたのですが、ここで区長から皆さんのご意見をお聞きになってのご意見や思いなどをお聞かせいただけますでしょうか。

奥野区長：
　いまパネラーの皆さんのご意見をお伺いする中で、やはりまず、若松に住みたいとか住み続けたいとまず自分自身が思わないといけない、思ってもらえないといけないかなと思いました。その中で、住み続けたいと思ってもらうために、若松がどのようなまちなのか、どういうことを

しているのか、逆にどのようなものが足りないのかも含めて、もう少しＰＲをしていかないといけないのかなと。その一つとして、先ほど松浦さんが言われた、農業体験なども含めてやっていかないといけないのではないかと思いました。また先ほど、藤村さんが若松全体として公共交通がかなり不足している、足りないと言われたと思うのですが、逆にお聞きしたいのは、どういう公共交通があれば、どういう場所を結べばより良い若松となるのか。できる、できないは別として教えていただければと思います。

藤村氏：
　例えば、観光の観点から見たら、週末だけでも若松北海岸と折尾駅などを結ぶシャトルバスがあると良いのではと考えます。私たちの世代は車の免許を１８歳になったら取るというのが当たり前だったのですが、最近の若い方は免許を取らない方が多いなと思うので、そういうのも大事かなと思っております。

進行（重岡）：
　松浦さんにもお尋ねしていいでしょうか。

松浦氏：
　私自身は公共交通機関をあまり利用せず、自分のペースで行きたいというのがあり、車で移動するのが好きです。ただ実際にいま生活していて問題だと感じるのは、例えば子どもが学校に行くのにバスが少ないだとか、帰りに乗るバスを逃すともう乗るバスがないだとか。そういうのが恐らくこのひびきの場所と若松の昔からある海岸とで温度差というか違いがあるのかなと。地域柄、人口が減っているということでどうしても避けられないところがあるとは思いますが、盛り上げていくということで、人が増えれば交通機関も増えるというところで、根本的にその部分を解決するために、みんなで協力してできることをやっていくことではないかと思っています。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。森さんにもお聞きしてよろしいでしょうか。

森氏：
　人口に対する公共交通機関のボリューム、割り当てはあるかと思うため、いま大々的に個人の利用者の為にたくさんのバスの本数を増やしたり、モノレールを敷いたりということは現実的に難しいと思いますが、パーソナルな公共交通手段を増やしていくという意味では、グリーンエネルギーを使ったＥＶ自転車やＥＶ自動車などを導入していくのも革新的なアイディアかなと感じています。

進行（重岡）：
　ＥＶの話はなるほどなと思いましたが、奥野区長いかがでしょうか。

奥野区長：
　皆さんご存じの通り、いまちょうどＥＶモーターズ・ジャパンの工場が、向洋町に建設され始

めましたので、ひびき内の工業地帯が次世代エネルギーということもありますので、若松区が先頭になり次世代の公共交通も含めてできればいいなと私も思います。一方でハードルは確かにあるのかなと思います。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。それでは、山手さんいかがでしょうか。

山手氏：
　先ほど少し話にあったように私は免許を持っていません。ここは公共交通機関しかないので、どうやって来ているかというと、電動自転車に乗って８キロくらい漕いできましたが、電動なのでまだ楽ではありますが、すごく汗だくになります。そういう時にふと欲しいと思うのは、学校の前までは無理だと思いますが、電車が欲しいなと思います。目の前に駅があったらこれはもう２０年経っても学研都市はおそらく栄えたままになると思います。このままいくと、人口も減り高齢化も進む中で、２０年後のここの学生たちがいろんな世代がごっちゃのお年寄りの方もたくさん乗っているようなバスで通学しなくてはいけないとなると、私自身はここにずっといるかわかりませんが、何か寂しいなというか、もっと栄えるのであれば、駅が欲しいなと率直に思いました。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。ここで会場の方から交通の利便性についてのご意見がありましたので読み上げます。「洞海湾沿岸に比べて、ひびき灘側、北海岸や芦屋海岸の交通の利便性が貧弱なので、回遊性の向上により魅力的なまちになってほしい。」ということで、なにかプラスで補足がありましたら。

住民Ａ：
　この辺に住む住民の者ですが、個人的には自転車に乗るのが好きなので、例えば宗像や芦屋まではサイクリングロードがきれいに整備されているんですが、北九州地区もせっかくここに接続すればものすごく海岸通りもきれいな風景が続いているのにパタリと切れてしまっています。一方で、頓田貯水池周辺にはサイクリングターミナルがあって、自転車を乗るエリアは整備されているのに、今となってはということでしょうが、例えば脇田の漁港付近にターミナルを移設させて海岸も走ることができるし、一方で今まで通りのルートで小さなお子さんも乗ることができるような環境にするとか。今ある自転車などを活用しながら、もうちょっと魅力あるものにできるのではないかと思います。先ほど折尾駅からバスをピストンでシャトルバスというような話もありましたが、拠点を一つ決めてしまえば、ここへ行けばこんなこともできる、そのルート上で先ほど松浦さんがおっしゃった通りちょっと自動車を止めて自販機で買うような感覚でいろんなところにも寄れるのかなと思うので、回遊性の向上のためにもそういったアイディアもあるのかなと思った次第です。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。お隣の方も手が上がっているようなんですが。

住民Ｂ：
　皆さんのお話をくっつけてお話ししますと、学研都市の者ですが、まず折尾に行くのに私はほとんどタクシーを使っています。バスは全然役に立たないので、忙しい人間なのでタクシーを使っております。また、国際化の話がありましたが、我々は国際的に有名な先生もたくさんいますので、呼ぶこともできるし呼んだこともありますが、どこに泊まるんだという話になって非常に難しくて、私はいつも旧かんぽの宿にお連れしていましたが、私が常に送迎していました。学研都市がハブとなるようにして、そこから北側へも行くというように、自動運転でもなんでもいいと思いますが、とにかくそのような構造にしていただければ、山手さんが先ほどおっしゃったように、ニワトリ卵でそういうシステムを作れば栄えるのは間違いないと思います。以上、よろしくお願いします。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。山手さん今のお聞きになっていかがですか。

山手氏：
　さすが先生、僕のことを補足していただいてものすごくありがたいなと思いました。

進行（重岡）：
　いま、かんぽの宿の話も出ていたんですが、かんぽの宿は景色もいいですしお料理も美味しいし温泉もあっていい所ですね。私の友人はすごく気に入っているんですが、そこに交通の利便性があればいいかもしれませんね。区長からはいかがでしょうか。

奥野区長：
　学術研究都市ということで、山手さんが先ほど言われた学研までのアクセスは非常に大事であろうと思います。いま考えてみますと、新しくなった折尾駅の桁下からシャトルバスが出ていますが、結構並んでいる状況です。オンタイムというか好きな時にという形にはなっていないのかなと思います。それが一番解決できるのは、個人的な意見として、ＬＲＴのような軌道系のものが本当はあればいいのだろうと思いますが、作ったはいいが採算性が取れないという行政の立場として、そういうことも言わせえていただきますが、そうは言いながらもやはり少し検討、研究のようなことは進めていければなと思います。将来的に学研都市だけではなく、若松全域の公共交通が、例えば北海岸が観光地化する、森さんがおっしゃった旧古河鉱業ビルみたいなところも含めて。また農業体験もできる、ひびきなどの埋め立て地の工業地帯もある、そういうところにどのようにアクセスしていくのが一番いいのかというのは、少し検討してみたいなと思います。

進行（重岡）：
　ありがとうございました。さて続いてですが、アンケートでいただいた中から、これは松浦さんに関係するかなというお声があったのですが、「北海岸を中心にした自然や海産物、野菜、果物の収穫体験、自然体験を生かしたアクティブな体験型観光地」という未来像、将来どうなったらということでお書きいただいたのですが、補足で何かご説明いただいてもいいですか。

住民Ｃ：
　簡単に言うと、実際にいまものを体験するとか、食べるとか、すること。観光客として来たときに買うだけではなく体験すること、食べること、飲むことができる。自分の手足を使った体験ができるような、観光地が増えればいいなと思います。例えば、北海岸で田中農園さんなど積極的に活動されている農家さんがいらっしゃいますが、収穫体験などは幅広く広めて、全体的に体験する場所が増えればと思います。また例えば、大学生、若者は農業体験をなかなかしていない世代になってきていますが、大学生は意外とそういうことが好きなので、先ほど公共交通機関の話もありましたが、北海岸と学研都市を結ぶシャトルバスがあれば、大学生がそれを利用してそういった場所に行って体験をして楽しみ、ＳＮＳを使って発信していく、というようなサイクルが出来上がると思い、そのような思いで書かせていただきました。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。松浦さん、いまお聞きになっていかがですか。

松浦氏：
　本当にそのようにやってみたいとシンプルに思いました。イベントを何回も企画するが大変であれば、大学生が小学生と一緒に農作業や収穫体験を一緒にするなど、そういう企画を作ってみても面白いのではないかと思います。その時に必要な交通機関を用意するとか、はじめはそういうところから始めて、地域の子どもと大人と学生が一緒に絡んで何かをするというのは、自然の中での体験は非常に作りやすく、より自然な形でできるようなイメージは出来ます。

進行（重岡）：
　伺っていて子どもと大人というお話がありましたが、そこにもうひと世代、学生が加わるとまた違ったアプローチや楽しみが生まれそうだなと思いました。ありがとうございます。
　アンケートいただいた中からご紹介したいと思いますが、これは藤村さんに関わりがありそうかなと思いますが「若松北海岸がコートダジュールのようなリゾート地になってほしい。豊富な食材や素敵な風、有名な景観を生かして」というご意見がありましたが、藤村さんどう思われますか。

藤村氏：
　私も共感いたします。そのためにはやはり、若者もしくはリタイアされた方で農業をされたい方などが気軽に始められるようなショップがあればいいのかなと考えております。

進行（重岡）：
　コートダジュールと聞いて区長が喜んでおられるような気がしましたが。

奥野区長：
　はじめに藤村さんが問題提起をされたときに、市街化調整区域の話があったかなと思いましたが、どうしても北九州は市街化と市街化調整区域と法律で線引きが決められています。藤村さんも、松浦さんも、わたくしも同じ中学校で同じ市街化調整区域に住んでいるのですが、なかなか開発ができないというのが事実だろうと思います。ただ、皆さんご存じの通り、人口がなか

なか増えない中で、正直なところ市街化をそのまま拡大していくのは厳しいかなと思っています。とは言いながら一方で、観光という観点、農産物の振興という観点で考えたときに、やはり北海岸に少し特徴を持たせて尖らせたいと思っています。市街化を拡大するというのではなく、ある程度エリアを決めて、例えばですがホテルができるエリアであるとか、先ほど松浦さんが言われた農産物の直売所ができるエリアなど、エリアを決めてそのような形で糸島よりもいいものができるように検討できればと考えているところです。

進行（重岡）：

糸島を超えてコートダジュールに、ということで若松が楽しみになってまいりました。ありがとうございます。アンケートから再びご紹介させていただきます。若松区が将来どのようなまちになってほしいですか、という問いかけに「海、山の自然に恵まれているので、農産物の大生産地となってほしい」とありました。「洋上風力や電気バスなどの企業進出が進んでいるが、もっと広く企業誘致に努めていただきたい。全国に向けて発信していただきたい」という願いのようなところもありますが。この点に関してパネリストの皆さんからいかがでしょうか。将来私たちのできることといえば、まず松浦さんから農業の大生産地ということでいかがでしょうか。

松浦氏：

補足というか、ご存じない方もいらっしゃると思いますが、現在キャベツの生産量は福岡県で一番多いです。全国でキャベツの生産地として指定されているのが、若松でブランド化している若松潮風キャベツです。その品質は全国でもトップクラスで市場の評価としてそのように評価されています。先ほど申し上げたように、職人気質の農家の方がたくさんいらっしゃいまして、後継者も他産地に比べて非常に多いです。やはりみんな、この若松農業に魅力を感じて後継者として日々奮闘しているんですが、私が思うに、大生産地になることが大事かということについて、これからの時代は全国的に野菜でも果物でも消費量がどんどんと減っていくだろうと思います。その中で、自分たちはやはりとにかくたくさんの人に食べてもらうというよりは、食べたいという人にどれだけ届けられるかにフォーカスして農産物を作っていきたいと思っているので、今後どういう作り方になっていくかというのは、やはり現在の社会情勢の中では、コストが高騰しているだとか、難しい部分はありますが、とにかく若松の野菜について味はしっかりしているのでその特徴を伝えて魅力を発信していけたらなと思っています。

進行（重岡）：

ありがとうございます。若松農業の後継者が多いというところに、未来の可能性を感じました。どこも後継者については悩んでおられるので、少し安心したというか、未来が明るくなったような気がいたしました。続いて、藤村さんにも伺ってよろしいでしょうか。

藤村氏：

いま、後継者の話が出ましたが、普段フィットネスジムをしていて、私の周りでは高齢の農家の方やご主人が漁師でという方がいらっしゃっているのですが、高齢で農家や漁業をされている方で若い跡継ぎがいらっしゃる場合はいいのですが、例えばスイカとかキャベツは重いですよね。収穫時期だけアルバイトを雇う方もいて、私はいつまで続けていけるのだろうと悩んで

いる方が非常に多いなと感じております。例えば、他の土地だったらＭ＆Ａなどが企業さんであると思うのですが、そういうことを言ってみても、高齢の方にとっては難しく考えてしまい諦めてしまう方が多いので、若松ブランドを衰退させないためにも、もっと簡単にできる仕組みがあればいいのではないかとかと考えています。

進行（重岡）：
　なるほどですね。いつまでできるのだろうか、という声は聞きますね。手伝いたいけれど、いや自分でという風になってしまうところがある。助け合いの度合い、一緒にやっていくということが課題となっているのかもしれないですね。一緒にやっていけると良いですね。森さんにも伺いたいのですが、企業誘致の点などでお考えのことはありますか。

森氏：
　企業誘致に関しては、学研の地に、ＡＩや人工知能、ＩＴなど新しい産業への転換が必要かなと考えています。またそのような中で、特に学研エリア、九工大、早稲田、北九州市立大学は理系キャンパスですので、この大学で勉強を、学研エリアで勉強してさらにこの地に住み続けるといったフューチャープランが出来上がるのではないかと思います。

進行（重岡）：
　先ほどあった、アカデミックなという言葉がキーワードとして印象に残っているのですが、起業については北九州市立大学の学生さんはどのような感じでしょうか。

森氏：
　そちらのほうは山手さん自身が。

山手氏：
　いま学内でスタートアップ研究という授業で先生の手伝いしているんですが、私が見てきた学生の中で起業したいという学生がいるかというと、多分１％もいないだろうなというのが正直なところです。私自身カシューナッツは起業しようかと思って進めていますが、実現できるかどうかわからないという状態で正直仲間が欲しいというのが一番にあります。私が今日お話しした学生さんたちは、みんな自分で何かをやって一生懸命やっている学生ですが、それですら結構出会うのが難しかったので、新しくどういう人たちが育てば若松にとっていいのかわかりませんが、もし起業したい学生だけを考えるのであれば、もう少しプログラムは作ってほしいかなと思います。要は学生が起業するためにはどういう意識を持つべきか、起業する仕組みやお金の取り方を学べたりするもの。指導教員を見付けて、補助金を取って３，４年生から始めても、あと１，２年しか北九州にいないとなると遅いので、学部１年生から、さらにできるなら高校生の時からこの大学とコラボしてプログラムをやって、北九州でこんなことができる、そんな講座、プログラムがあれば連携してやっていけるのかなとは感じています。

進行（重岡）：
　起業とタイアップする中で、起業する力を蓄えるという感じでしょうか。

山手氏：
　もっと早くから勉強してほしいなというのがあります。

進行（重岡）：
　北九州市内、高校生や大学生とタイアップして何かを作ったというトピックスは多いほうだと思いますので、それがもっと一般的に向いていくと良いのかもしれないですね。
　次のアンケートをご紹介したいのですが、これは森さんにも関連があるでしょうか。若松区は将来どんなまちになってほしいですかの問いに対して「古きよきものは残しつつ、豊かな観光資源、住みやすさなどをよりＰＲして、ワーケーションなど新たな人の流れを作りかつての賑やかなまちを復活させてほしい」というご意見があったのですが、古き良きものを残しつつという面で、建築などでなさっているかと思いますが、森さんいかがでしょうか。

森氏：
　南海岸を中心とする建築遺産の方では、私は建築遺産トラストというＮＰＯで少なからずお手伝いをさせていただいているんですが、やはりもうすでに取り壊されてしまった価値ある建築たちが眠っています。そういった悲しい事件というか、事故を起こさない、起こさずにこれから今あるものをどう大切にしていくか、そして活用していくかというものは市民の皆さんの力で成り立っていくものなのかなと考えています。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。ご意見の中に、ワーケーションという今の言葉が出てきましたが、今風というかコロナでよく出てきたワーケーションについて何かパネリストの方で情報をご存じであるとか、こんなふうに若松でワーケーションできたらいいなと思われることはありませんか。藤村さんいかがでしょうか。

藤村氏：
　私の実家がゲストハウスをやっていますが、例えば海の近くで借りて週末だけでもワーケーションをするとかそういう形があってもいいのではないかと思います。休憩時間に釣りをしたりですとか。

進行（重岡）：
　いまはまだそこはなさってらっしゃらない？

藤村氏：
　できる形にはなっています。

進行（重岡）：
　藤村さんのところでワーケーションをして、仕事をしながらちょっと煮詰まったら釣りに行けたりする環境なんですか。

藤村氏：
　そうですね。できます。

進行（重岡）：
　それを知らない方が多いですよね。やはり発信は大事ですね。ありがとうございます。それでは続いてご紹介したいんですが、「人や物の往来が増えて多くの人にたくさんの魅力を感じてほしい。観光都市になってほしい。」ということで、観光がまたキーワードとなっていますが、山手さんからいかがでしょうか。

山手氏：
　私の専門はアントレプレナー教育なのであまり観光が担当じゃないんですが、じゃあ僕が若松区を観光したか言われると、なかなか観光はしていません。少しだけ海を見に行ったりはしたんですが、もう少し大学生向けに観光ツアーみたいなものをやってほしいなとは思います。留学生会館というものがあり、ここの学生が集まって年何回か留学生のみの旅行みたいなものはありますが、それを北九州大や九工大の学生に広げて知識を知ってもらえるようなワークショップのような１日体験みたいなものを増やしていただけると、少し興味をもてるのかなと感じました。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。留学生会館があるということで、留学生の方に若松を案内するならどこを案内するみたいなところは。

山手氏：
　若松を知っていたらここ、と言いたいんですが要はそれを知らないことが多分問題だと思っているんですよね。私も若松に少なくとも４年は住んでいたのですが、ずっと学研都市にひきこもっていて、特に大学の４年間なんて博多に行ったことも１回もなかったです。なんなら小倉に３回行っただけで、そんな暮らしをしていたので、そういうひきこもりのような学生にも知ってもらえる取り組みがあれば嬉しいです。

進行（重岡）：
　区長の方からいかがでしょうか。

奥野区長：
　情報が皆さんに行き渡っていない感じなのかと思いましたので、情報を一元集約して、そこに来れば、そこにアクセスすれば若松の観光地であったり、イベントであったり、そういう拠点となるような場所なりホームページなど、そういうものがあったらいいのかなという風に受け止めましたので、そこは少し検討してみたいと思います。そこにアクセスすればどんな情報でも見ることができる、ということで、例えば松浦農園さんが今農業体験をやっているとかも含めて、色々な情報がそこに一元管理できるようなことを作れば、そういう場を設ければと感じました。

山手氏：
　拠点であれば、北九大も九工大もコワーキングスペースの整備を進めていますし、学研都市ひびきのでもＦＡＩＳ（北九州産業学術推進機構）さんが最近コワーキングスペースをやっていますので、そこに情報を流してもらい、そこに来ればすごい高級なバイトがあるよだったり、乗り物のフリーパスがもらえるよみたいな、なんかおまけ付きで集められると私たちもちょっと行ってみようかなと思うので、フリードリンクの横にチラシを置いてもらうととかしてもらえるとありがたいなと思います。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。おまけつきというか、モチベーションが上がるような仕掛けがあると良いかもしれないですね。
　それでは、会場からいただいたアンケートをもう一枚紹介したいと思います。あなたが考える若松区の魅力を教えてください、という質問に対して「魅力は自然と歴史、古き良きものがあるまち。子どもを育てるのに公園などアクセスしやすい所」というご意見をいただきました。公園は充実していますか。パネリストの方でご存じの方、松浦さんからいかがでしょうか。

松浦氏：
　グリーンパークなどはいくらでも走れますし、広大な芝生が広がっていてあそこは素晴らしいですね。

進行（重岡）：
　芝生公園ですね。先ほどの魅力発信の中にもありましたね。それでは、将来どんなまちになってほしいですか、という質問に対して「若松に住んでいる人が自分のまちのことを自慢できるまちになってほしいです。ちなみに、我が家の家族はみんな自分のまちが大好きです」といただきました。ありがとうございます。これについてパネリストの皆さん一言ずついただいてもいいですか。自慢できるまちにするために、どうすればいいのか、何かヒントになるようなことがあれば。松浦さんからいかがでしょうか。

松浦氏：
　私はピンポイントでそれは教育だと思います。子どもが体験することによって、それを例えば家に帰った後に兄弟とか家族とかに共有できて、それがまた家族としての体験につながったりすることがあると思うので、色んな体験ができて、そこに１回は行ったことがある、というようなことが言えるそんな環境づくりを大人がしていくことが大事なのではないかと思います。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。藤村さんはいかがでしょうか。

藤村氏：
　私ももちろん自慢できる若松だと思うのですが、それは自分が魅力を知っているからだと思っているので、松浦さんがおっしゃったように小さなころから教育することも大事ですし、その魅力を伝えるイベントをＰＲしていくことも大事だと思っております。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。森さんにもマイクを回してよろしいですか。

森氏：
　私は、自慢できる、という表現はあまり得意ではなくて、私自身も自分のことを話すのが苦手なので、どうやってアピールしたらいいのだろうと思います。ただ、自分の中にプライドのようなものはあって、自分の特性であったり、誇りがあるように思います。それは私が、ＮＰＯで環境保全活動だったり、遺産トラストであったり、建築遺産であったり、そんな色々な活動をさせていただく中で、ここにいらっしゃる方々もおそらく、シビックプライド、市民としての誇りといったものはお持ちで、だからこそこういった会議に参加して他の区でも皆さん活発に議論されているのだと思います。こういった機会をもとにうまく表現できる、アピールする力をみんなで身につけていけばいいのかなと思います。

進行（重岡）：
　まずは参画してというところでしょうか。ありがとうございます。山手さんからもよろしいでしょうか。

山手氏：
　私の個人的意見としては、若松区をどれだけ好きかな、という風に感じます。私自身、北九州出身ではないため、この北九州にきて６年の間にかなり自己紹介しているのですが、私の地元について喋るときは、ニコニコで、どうだすごいだろうという感じで、自己ＰＲのような感じで出身地についてお話をするので、どれだけ皆さんが自己紹介をするときに話したいような内容があるか、一回考えてみるのが一番いいかなと感じています。

進行（重岡）：
　そうやって考える中に、未来の若松像が見えてくるかもしれませんね。ありがとうございます。それでは、奥野区長からもよろしいでしょうか。

奥野区長：
　今日、パネリストの方の色々なお話を聞いてみて、大きく課題には何があるのかと思ったときに、先ほどから話題になっている、やはり情報の集約と共有、大きな意味での人材育成、若松全体を含めた魅力づくりをやっていかないといけないかなと正直思いました。先ほどシビックプライドという話もありましたが、やはり小さい頃から色んな事に触れていただいて、体験をしていただくことによって若松に対するプライド、誇りがもてる。それによって定住促進につながる。さらに言うと若松の企業がどういう事業をやっているのか、どういうことをやっているのかというのがわかれば、どんどん若松の人口も増えていくし、さらに北九州の人口も増えていくのではないかと思いました。さらに、それらを大きくまとめると、教育と観光をみたいな形になってくるのかなと思いましたので、教育と観光を掛け合わせて若松をどんどん活性化できればいいかなと思いました。藤村さんもはじめにポテンシャルはあると言われたと思いますが、そのポテンシャルを生かせないと意味がありませんので、そこは今日お集まりの方々も含

めて皆さんでつながって、オール若松で頑張っていけるようにまちづくりをできればいいかなと感じました。

進行（重岡）：
　ありがとうございました。そろそろ時間もいいころ合いとなってまいりました。

会場内
　会場の方からも発言されたい方がいらっしゃるんですが。お時間はないですか。

進行（重岡）：
　お時間の都合でおひとりだけとさせていただいて。申し訳ありません。

住民Ｄ：
　若松北海岸で飲食店をさせてもらっています。我々、４９５号線をおさかなロードと銘打ちまして、１５、６年前から活動をしています。コロナをはさんで継続がいま不可能となっているのですが、今日おっしゃったことはすでに我々は個人的な商店の集まりでほとんどやり尽くしているんです。なぜこれが継続できなかったかということを今反省している中で、トマト狩りもしました、キャベツ狩りもしました、スイカ狩りもしましたが、地引網もしました。若松区内バスで回ってお客さんを拾って回って、若松の市報に載せてもらってそういう経験もしています。ただ、悲しいかな一般の我々がするとお金儲けだけに走っているのではないかとみられることが一つと、個人経営の店ばかりですると、どうしても長続きができないんです。だからここを少しだけ、区や市がサポートしていただくと、皆さんにももっと楽しんでいただくことができると思います。松浦さんがおっしゃったように、美味しいものもたくさんありますし、見るところもたくさんあります。私のところに来られる県外のお客さまも、わざわざ県外からひまわりを見に来た、夕日を見に来た、でも駐車場がないんですと言っておられるんです。その小さなことの積み重ねが大きなことにつながっていくと思います。どこの未来を見るのか、近くの未来を見るのか、遠くの未来を見るのか。近くの未来の積み重ねが遠くに繋がっていくのではないかと。簡単なことをちょっとだけ、１個だけ進んでしていただければ、それが長く続くのではないかと考えている次第です。どうぞ今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

進行（重岡）：
　ありがとうございます。他にも手を挙げていただいたのですが、時間の都合上、おひとりに限らせていただきました。

パネリストによる「〇〇なまち」発表

進行（重岡）：
　最後に一言ずつパネリストの皆さんからいただきたいのですが、今回のこのミライ・トークで色々と出てきた意見を振り返っていただいて、将来若松はどんなまちを目指していこうとしているのか。その方向性に当たる言葉を、将来の若松は〇〇なまち、というフレーズで一言ずついただけますか。藤村さんからお願いします。

藤村氏：

いま、いろいろと思った以上にアンケートでたくさんご意見をいただいたんですが、個人的な話になりますが、以前、若戸大橋とか若戸トンネルが無料になるときに、がんばろう会として、クロス乾杯でギネス記録に挑戦させていただきました。そんな記録は 5,000 人くらい来ないと難しいということで、いろいろと広報をしても人が集まらず苦労しましたが、当日想像以上の方がいらっしゃったときに、若松ってすごく地元愛が強くて、若松のためには何かあればやると、という方が非常に多いなと感じています。ということで、私は「元気　若松　地元愛溢れるパワフルなまち」を目指していけたらなと考えております。

進行（重岡）：

ありがとうございます。クロス乾杯すごかったですよね。私も記憶に残っています。それでは続いて松浦さんお願いできますか。

松浦氏：

私が考える未来の若松はどういうまちかなというところで、今ないものがある、それは何かというと、いろんな産業がある中で、それぞれが点として存在していて、藤村さんも言われていましたが、それがなかなかつながっていない。そういう点において「他産業とつながっていく、つながるのを待つのではなく、自分からつないでいこうとする、つなぐ、つながるまち」と言わせていただきます。私も農業を始めていま 15 年くらいですが、なんとなく少し行き着いた感覚があり、この先何があるのか、このまま飽きてしまったらどうしようかと不安に思うこともあるのですが、おそらくここから先は横のつながりをもっていき、そこから新しいアイディアや企画を一緒に考えていく段階に入っているのではないかと思います。そこをしっかりとつながるように動いていきたいと思います。

進行（重岡）：

ありがとうございます。それでは森さんからも、〇〇なまち、将来の若松像をお聞かせください。

森氏：

私は「古きを重んじ、新しさを追求するまち」を目指していければいいのかなと思います。古きというのは、やはり南海岸のほうにある建築物です。新しさというのは、学研の新しいまちとしての在り方を今後追及していくことが、若松の将来像を決めていくことかなと思っています。

進行（重岡）：

ありがとうございます。先ほど会場からのご意見にもありましたね。それでは続いて、山手さんお願いいたします。

山手氏：

私は将来を考えると「若者が頑張るまち」だと思います。ひびきの小学校がありますが、全国で一桁に入るぐらい子ども達が多いですので、この子ども達が 10 年、20 年経つと大人になって、この地域を支えるような人材になると思います。その子ども達が活躍できるような場をい

まの大人達が作っていく必要があると思います。若者を応援できるような、頑張れるまちを作りたいと思います。

進行（重岡）：
　若松が頑張る、みんなが応援するそんなまちができていくと良いですね。いまももちろんそれはあるかもしれませんが、さらにということでしょうか。ありがとうございました。皆さんからご意見をいただきました。
　それでは最後に、武内市長より本日を振り返って一言申し上げます。お願いいたします。

武内市長：
　今日は皆さんありがとうございました。参加していただいた皆さん、見ていただいた皆さんも本当にありがとうございました。本当にいろんな底力、ポテンシャルがある、一つのテーマだけではなくいろいろな話になったということは、それだけいろんな要素が埋まっているということが改めて分かりました。それから、皆さんの若松愛、愛情がものすごく伝わってすごくいいなと思いました。一方で、何が埋まれば、どのピースがハマれば、一気にこれがスパークするのだろう。でもそこがみんなで一生懸命に今日手探りしたという印象がありました。交通の話もありましたが、どうやって便利なまち、機能するまちになっていくかということも必要だろうと思います。ただ、若松の場合、今日いくつかあった中で、今後このまちを便利にして機能させていくということだけではなくて、一気にもう少し新しいコンセプトとか新しいチャレンジをしていく可能性に満ちているのではないかと思います。自然も豊かで、食も豊かで、ある意味五感をものすごく刺激してくれる、そういうまちという要素もあると思います。いま、Sensuous City と言って、官能都市という概念もあるんですよね。いろいろな感覚を研ぎ澄まさせてくれるまち、そういう素地が若松にはものすごくある。それから、先ほど見たことないものが見えるまち、というようなことをおっしゃっていましたが、新しい価値観やライフスタイルといったものにも、過去の歴史とこれからの未来を掛け合わせてチャレンジするような可能性も埋まっているような気もしました。また、今日は議論にあまりならなかったですが、高齢化率が非常に高いということもありますので、逆に高齢化を武器にして高齢化だからできる、チャレンジできる領域ももしかしたらあるかもしれません。そういったものをもう一回掘り出していって、先ほど区長が言ったような、それらをちゃんとつなげていく、そして発信していくということが、第一回のヒントとして色々といただいたかなと思います。土地の問題にも詳しい区長が来ておりますので、ぜひ行政としても皆さんと一緒にこれから進んでいきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

進行（重岡）：
　ありがとうございました。以上をもちまして、ミライ・トーク in 若松区の第１弾を終了させていただきます。

以上